

講座名（専門科目名）	産科学婦人科学講座	教授氏名	小玉美智子
学生への指導方針	指導者ご自身の臨床上の問題意識に基づく自由な発想のもと研究を展開してもらいます。		
学生に対する要望	自分で自由な発想をするためには、自分でしっかり勉強してください。		
問 合 せ 先	(Tel)06-6879-3351 (Email) jimmu@gyne.med.osaka-u.ac.jp	担 当 者	松崎慎哉
その他出願にあたっての注意事項等	医師、基礎研究者の修士・博士課程希望者は出願をされる際に jimmu@gyne.med.osaka-u.ac.jp にご連絡下さい。（※海外の方はまず大阪大学の事務にご連絡して下さい。）		

産科学婦人科学教室内には、内分泌、病理、周産期、免疫の4つの研究グループがあります。内分泌グループは主に情報伝達経路や増殖因子の分子レベルに至る解析結果から見た婦人科癌の診断・治療にかかわる研究や、がんサバイバーの女性ヘルスケアに関する研究などを、病理グループは形態病理に関することに加えて子宮頸がんの予防や早期治療に関する疫学的研究、京都大学・岩手医科大学と共同でがんの薬剤耐性や細胞表面の分子標的の探索などを、周産期グループは臨床的な胎児診断・治療に加え、胎児治療のための胎児への免疫寛容の導入モデルの確立、子宮収縮を新しい多チャンネル子宮筋電図から解析する研究などを、免疫グループは配偶子の新たな凍結法、着床のメカニズムと着床能の診断、などを行っています。我々の研究室は産科学・婦人科学・生殖医学のすべての領域を網羅しています。病院では年間200件以上の婦人科浸潤がんの初回治療、500強の分娩（そのうち70%以上がハイリスク妊娠）、年間30件程度の母体の危機的状態の搬送患者の受け入れ、年間100周期の補助生殖医療などを行っていて、その臨床現場からも診断学、手術学や治療法の検討など様々な論文が生みだしています。大学院は医師に関しては産婦人科専門医取得をする前後の学年（卒後5～6年）から入学してもらい、原則として1年間は阪大病院の主に病棟の担当医をしながら産婦人科領域の高度急性期医療を学び、残りの3年間は若干の当直業務と、専門性を高める特殊外来を担当する以外は病棟の受け持ちなどもなくして、研究のためだけの期間にしています。基礎研究を志す修士・博士課程の皆さんには体外受精の胚培養などの経験をしていただくことも可能であり、もう一度研究室で基本から考えてみようと思う胚培養士の方などにとっても十分な研究をしていただける環境となっています。教室から刊行されたここ数年の主な論文を以下に示します。ぜひ、私たちと一緒に臨床研究・基礎研究を極めましょう！

Yagi A et al. The looming health hazard: A wave of HPV-related cancers in Japan is becoming a reality due to the continued suspension of the governmental recommendation of HPV vaccine. Lancet Reg Health West Pac. 2021;18:100327.

Yagi A, Ueda Y, et al. Epidemiological and clinical analyses of cervical cancer using data from the population-based Osaka cancer registry. Cancer Res. 2019 15;79:1252-1259.

Matsuzaki S, Kimura T. Vasa Previa. N Engl J Med. 2019;380:274.

Nakamura H, et al. Vaginal bioelectrical impedance determines uterine receptivity in mice. Hum Reprod. 2018;33:2241-2248.

Sasano T, Mabuchi S, et al. The Highly Metastatic Nature of Uterine Cervical/Endometrial Cancer Displaying Tumor-Related Leukocytosis: Clinical and Preclinical Investigations. Clin Cancer Res. 2018;24:4018-4029.

Hiramatsu K, et al. LSR Antibody Therapy Inhibits Ovarian Epithelial Tumor Growth by Inhibiting Lipid Uptake. Cancer Res. 2018;78:516-527.

Kodama M, et al. In vivo loss-of-function screens identify KPNB1 as a new druggable oncogene in epithelial ovarian cancer. Proc Natl Acad Sci U S A. 2017;114:E7301-E7310.